

【講演日時】 H28.2.14(日)10:00~12:00(講演自体は約 90 分間)

【開催場所】 相模原市立東林小学校 体育館

【講師】 東海大学付属相模高等学校 硬式野球部監督 門馬敬治氏

【テーマ】 子どものモチベーションの上げ方

【講演内容(主なキーワード)】

- 恩師 原貢さんからの言葉に「東海大相模という学校名や監督の名前に惹かれて人は付いてくる。それにそぐう人間であるか?」という教えを重く受けとめている
- 目標は全国制覇、しかし目的は人間形成
- 自分の子供が突然金髪に染めたら、どのような言葉をかけるか?
現代社会は、「多様化」「スピード化」が激しい。これまでの常識は明日の非常識
誰と出会うか、そこから何を選ぶか?
危険な世の中になっている中、自分の実力だけが唯一の保険
- 日本と世界の競技場の違い。日本の基準は「幾らで作るか?」。世界の基準は「幾ら収益を上げるか?」「如何に再利用するか?」であり、「スポーツは富を生み出す」という考えに基づいている
モチベーションを上げるための一つのキーワードは「環境の整備」
お金が無いと野球はできない。親がいないと野球はできない。
- 夢を実現できないのが罪ではなく、夢を持たないのが罪
指導者は、「勝つこと」と同時に「成長させること」
アメリカには、「No pass No play 制度」という考えがある。学校の成績が 70%以下であれば部活動に参加させないというぐらいに徹底している
- 「自力」と「他力」という言葉があるが、後者(人から言われたこと)はうまくいかなくなると簡単に捨ててしまう、ひどい時は人をも捨てる。
人のコピーではダメ
何も考えずにまずはやってみること、一歩を踏み出さないと何も始まらない
- ある実験で階段とエスカレーターがある場所でロッキーのテーマソングを BGM として流したところ、流さない時の階段の利用率は 16%であったが、流した時には 32%にアップ。人の意識を変えるには、「映像や音(音楽)」もキーワードになる。横浜スタジアムでの横浜戦に備えて、練習の時に横浜高校の校歌を流したことがある。球場が満員となる中、男子校の横浜高校の応援席からは迫力ある応援歌が流れる。その環境に慣れておくのが目的
- 教え子に一二三くん(阪神ドラフト 2 位指名)がいる。優勝候補に挙げられながらも甲子園では一回戦負け。その途端、マスコミの扱いは一気に変わる。彼がその後に奮起できたのは、彼自身が「今に見てろ!」という反骨心があったからこそ。その彼がオーバーハンドからストライクが入らずに悩んだ時期、私自身(門馬監督)、どのようにしたら良いか「自信」が無くなった。なぜその時に「自信」が無くなったか? それはこれまでに「やったことがないこと」であったため。「やったこと」であれば、経験や成功体験を語るができる。しかし、やったことがなければ、不安しかない。諦めてしまう。自分に期待ができない。
「逆境」の反意語に「順境」という言葉がある。逆境に耐えた者が評価されがちではあるが、本来であれば順境の時こそ評価されるべきことがある。(一二三くんの例を取り上げて説明)
- 「努力」とは何か? 私だったら「頑張り『続けること』」と答える。三日坊主という言葉があるぐらい、人間とは継続することが難しい
- 「偶然」と言われることがあるが、そこには「必然」が重なった時に初めて結果に現れるもの。「本気」の経験、「本気」の失敗を如何に味わってきたか、が重要
- 「一生懸命」にやってもダメ、しかし「一生懸命」にやらないとダメ。つまり「一生懸命」にやるのが目的になってはダメ。普通じゃダメだということ、工夫すること。毎日やると当たり前になる。常識を覆すこと。昨日の常識は、明日の非常識
- 「感覚」と「色彩」も重要なキーワード。チームのエンブレムを作ったり、「縦じまのプライド」という言葉で鼓舞してきた。チームを好きになること、プライドを持つこと。チームの今いるポジションを知ること
- 運営戦略の存在として、「こだわりを持ち」「ぶれない軸」「挑戦的であり」「新しい価値を創造する力」が重要。リスクを恐れず、挑戦すること。Baddest=Challenge
- 指導者は、「自ら見て」「自ら考え」「自ら動く」こと。自立型の育成を目指すことが大切
「声をかける」「見守る」「タイミングを見る」
自発性を引き出すと、「創造性」「積極性」「個性」「多様化」
「協動的な人間関係」「フラットな人間関係」
「チャレンジ」とは、「変化に対応できる者だけが生き残る」「成長しないなら死にかけている」
- 最後のキーワードは、「言葉」
平凡な教師は、言って聞かせる
良い教師は、説明する
優秀な教師は、やってみせる
最高の教師は、子供の心に火をつける <ウィリアム・ウオードの名言より>